緑の風

MIDORI NO KAZE

4月号
vol. 251
2021年3月31日

●編集
NPO法人
多摩住民自治研究所
日野市神明3-10-5
エスプリ日野103　〒191-0016
TEL：042-586-7651
FAX：042-514-8096
E-mail●tamajitiken1972@space.ocn.ne.jp
URL●http://www.tamaken.org/

『教室に注ぐ光』（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館にて／2019年8月10日／撮影：編集部）

● 【特別寄稿】星野一人（社会教育推進全国協議会事務局長／多摩住民自治研究所理事）
社会教育研究全国集会～南三陸町からの発信

● 【多摩が動く】本田恒平（LGBTQ+ Bridge Network）
「一橋大学アウティング事件」について～事件とその後のとりくみを聞く（後編）

● 【財政研究会リポート　第64回学習会】堀内通成（多摩住民自治研究所理事）
小平市の新年度予算について

● 【書籍のご紹介】本田浩邦（獨協大学）
ディストピア小説が描く米保守政治の末路
マーガレット・アトウッド『侍女の物語』『誓願』、オマル・エル＝アッカド『アメリカン・ウォー』

NPO法人 多摩住民自治研究所

50th Anniversary tamaken INSTITUTE of LOCAL SELF-GOVERNMENT in TOKYO-TAMA since 1971

緑の風 MIDORI NO KAZE

もくじ 2021年 4月号

vol. 251

【特別寄稿】
社会教育研究全国集会～南三陸町からの発信 1
社会教育推進全国協議会事務局長／多摩住民自治研究所理事 星野一人（ほしの・かずと）

【多摩が動く】
「一橋大学アウティング事件」について（後編） 4
事件とその後のとりくみを聞く LGBTQ+ Bridge Network 本田恒平（ほんだ・こうへい）

【財政研究会リポート 第64回学習会】
小平市の新年度予算について 8
多摩住民自治研究所理事 堀内通成（ほりうち・みちしげ）

【書籍のご紹介】
ディストピア小説が描く米保守政治の末路 10
マーガレット・アトウッド『侍女の物語』『誓願』、オマル・エル＝アッカド『アメリカン・ウォー』
獨協大学 本田浩邦（ほんだ・ひろくに）

【タマの風 vol.94】
3・11から十年 ④死者との対話をどう描くか？ 14
東京工科大学准教授・「緑の風」編集員 神子島 健（かごしま・たけし）

活動報告 17

表紙写真ひとこと

今月号の表紙の写真は、一昨年の夏、多摩研ほかの有志メンバーによる宮城県沿岸部調査ツアーで、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を訪ねた際の一枚（本紙233、234号参照）です。3週間前、「3・11から十年」という多くの特集番組によって呼び起こされた記憶とかなしみが浮遊したまま、落ち着く間も無く、緊急事態宣言が解除され、復興を冠した五輪の聖火リレーが騒々しさを先頭に福島をスタートしました。先日、友人からのメールの最後に「それにしても何度も禁煙に挑戦しているみたいな緊急事態宣言は、なんとかならないもんでしょうかね。」と書かれおり、失笑。ほんとなんとかしなくてはです。（文責・妹尾）

社会教育研究全国集会

～南三陸町からの発信

（社会教育推進全国協議会事務局長／多摩住民自治研究所理事）　星野一人

社会教育に関わる職員、市民および研究者らが一堂に会し研究と交流を深める「社会教育研究全国集会」。昨年、新型コロナウイルス禍で延期となった第六〇回の集会は、あらゆる形での開催方法を模索しつつ、あらためて今夏、宮城県南三陸町をメインの会場に開催を予定しています。

社会教育研究全国集会とは

社会教育研究全国集会（以下「全国集会」）は、もともとは『月刊社会教育』（以前は国土社、現在は旬報社から刊行。以下『月刊』）の編集部が主催する読者会としてスタートしたのが起源で、一九六一年に東京・目白で第１回集会が開催されました。その後、六三年の集会に際して、全国につながりを持つ常設の民間団体として社会教育推進全国協議会（以下「社全協」）が設立され集会を主催、さらに七二年からは基本的に開催地で結成される実行委員会と社全協の共催というスタイルで開催されています（ただし、年によっては社全協が単独で開催するパターンもあります）。

全国集会には、日々の暮らしや地域のなかのさまざまな課題を解決し、新たな可能性を切り拓こうと学び、活動している人たちが全国から集います。以前は社会教育を学ぶ多くの学生が参加し、社会教育の現場や研究の中核を担う力を持った人びとを世に送り出してきました。近年は学生の参加は減少傾向ですが、代わって地域の多種多様な活動に参加する市民、とりわけＮＰＯ関係者の参加が目立つようになりました。また、参加する職員も非正規雇用や指定管理者の財団・企業等に所属する職員など多様化しており、そうした参加者のニーズにどう応えていくのかも大きな課題になっています。

南三陸での開催の経緯

二〇二〇年に開催を予定していた第六〇回の全国集会は、諸般の事情で地域レベルの実行委員会を結成しての開催が難しかったことから、社全協単独での開催

第５２回・高知集会（２０１２年）交流会にて

を前提に準備が進められました。全国の会員のつてを頼り、候補地がいくつかに絞られたなかで、宮城県内での開催が有力となりました。仙台市内など複数の場所が検討されましたが、被災地での開催により、新たな研究課題や交流が深まることを願うとともに、宿泊の条件も整う見込みがあったことから、最終的に南三陸町での開催が決定しました。

一方、社全協単独での集会開催は、従来は常任委員会が取り組むものでした。しかし、集会準備の複雑化や常任委員の多忙化など、常任委員のみによる集会準備の負担増大が組織的な問題となっていました。そこで、今集会は「実行委員会」（従来の開催地ベースの実行委員会とは別物）をつくり、常任委員だけでなく分科会の世話人や関係する個人にも参加を募り、役割分担しながら準備を進める体制となりました。こうしたスタイルでの開催は初めての試みで、まさに走りながら試行錯誤を重ねているところですが、社会教育関係者から寄せられる集会への熱い期待は今も変わらないなかで、どのように今後を見据え「持続可能な集会づくり」を実践していくのかが問われていると感じます。

さて、その実行委員会は二〇二〇年一月に結成され準備を開始しましたが、ほどなくコロナ禍に見舞われ、春先には集会の開催自体をどうするのか判断を迫られる事態となりました。いくつかの選択肢を検討したうえ、可能な限り現地での開催を追求したいという意見が相次いだことが決め手となり、集会全体を一年延期するという判断に至りました。こうして二〇二一年夏をめどに仕切り直し、開催に向けて再出発することとなりました（延期に関する詳細な経緯は『月刊 社会教育』二〇二〇年七月号掲載の拙稿参照）。

ただし、コロナ禍が容易に収束しない状況が続き、ワクチン接種も未だ先が見通せません。やむを得ずプログラムの一部をオンライン開催するなどの方法も取り入れながら、これまで参加したことのない方にも参加しやすい集会づくりができればと考えています。

集会延期でも得られた成果

集会は延期になりましたが、そのなかで生まれた成果もあります。

今回の集会は、当初、プログラムの一部を宮城県教育委員会が主催する「社会

教育・公民館等職員研修会」と合同で行う予定でした。この研修は、県内の関係職員を対象に原則として年四回開催され、プログラムの企画運営には現場職員も関与しています。そこで集会と研修の合同開催が縁となり、社全協は年間を通して研修の開催に間接的に協力することとなりました。コロナ禍で全プログラムがオンライン研修となり、県内に限らず全国どこからでも参加が可能となったことから、県内の社会教育関係職員と全国の社全協会員が交流を深める貴重な機会を持つことができました。

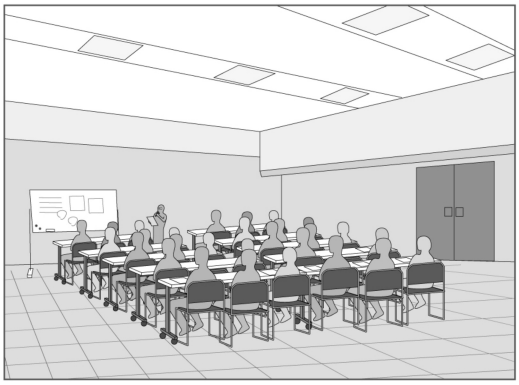
具体的な内容は、まず研修に先立ち六月に「地域再生と社会教育」と題したシンポジウムを特別企画として開催しました（詳細は『月刊』二〇二〇年九月号・一〇月号に掲載）。第一回（六月）では公民館での具体的な実践を通して社会教育の基本原理を確認しました。第二回（八月）は白石市教育委員会が主催（県教委が共催）し、人口減少による地域存続の危機に公民館がどう向き合って実践を積み重ねていたのかを学びました（詳細は『月刊』二〇二一年一月号・二月号に掲載）。第三回（一一月）と第四回（一月）は文部科学省の事業「共に学び生きる共生社会コンファレンス」と連動した企画とし、健康学習の実践や認知症の当事者運動、障がい児・者とともに生きる実践などを通してどのような地域をつくっていくのか、そのために社会教育は何ができるのかを考えました。

なお、この間の状況の変化などにより、延期後の集会では職員研修との合同開催は難しくなりましたが、研修を通して現地の職員との関係や開催地に対する理解も深まり、結果として年間を通したプレ企画のような役割を果たしたのではないかと思います。

多摩研会員のみなさまもご参加を

今回の集会は延期により、奇しくも東日本大震災から一〇年という年に被災地である南三陸町から発信することとなりました。すでに分科会の企画によるプレ学習会などで、復興計画がもたらした住民自治への影響や、被災経験から生まれた学びなどが報告されています。集会自体もオンライン開催を取り入れるなど、遠隔地からでも参加が容易になる見込みです。全体会のほか数多くの分科会が設けられる予定です。多摩研会員のみなさまにも各自の関心に引き寄せて集会にご参加いただければと思います。

なお、詳しいプログラムや参加方法は六月上旬ころに社全協ホームページ（http://japse.main.jp/）に掲載予定です。多くの方のご参加をお待ちしています。



シリーズ 多摩が動く

「一橋大学アウティング事件」について（後編）
事件とその後のとりくみを聞く

二〇二〇年一二月実施　聞き手●緑の風編集部

（ＬＧＢＴＱ＋ Ｂｒｉｄｇｅ Ｎｅｔｗｏｒｋ）**本田 恒平**

『緑の風』vol・249（二〇二一年二月）に掲載された、「一橋大学アウティング事件について」のインタビュー後編になります。

事件の経緯と問題点について触れた前編から、後編では現代の多様な価値観の中で率直な言葉を交わしました。

社会に対する問題提起の形

編集部　私の年齢ですと、ゲイカルチャーといったものが世の中に存在する前提で生きてきているので、好ましくはないですが茶化すような事はあっても、他人を攻撃する意図で同性愛について発言する事はあまりないと感じて居たので、そのような認識の人がそれほど多く居る事にショックを受けます。

本田さん（以降敬称略）　例えばテレビのコントで「保毛尾田保毛尾」だとか、私が高校生の時はもうすでにはるな愛さんやマツコデラックスさんバンバンテレビに出ていて、それに対して日本ではまだＬＧＢＴＱって記述は与えられておらず、過剰な表現でしたが、同性愛の人間がいるという事が伝わりました。一方で「お前ホモなのか」といったような差別発言が出て来たのが一つあり、二次元的権力や三次元権力の影響を受けたり、もしくは昔のソドミー法のような時代よりはまだマシかもしれませんが、やっぱりＬＧＢＴＱの人たちが社会に出ると同時にマイクロアグレッションやハラスメント受けるというのは、ある意味でセクシャリティというものが有名になっていくことによって社会問題化するという側面もあります。

ただ、差別される人は自分の人生ですから、俯瞰的に見れず、自分が今日生きるか死ぬかの次元で戦っているので一概に良かった悪かったとはいえませんが、一つ言えるのは前述のような表現が過激な形で社会に出てくるのは、何かしら社会に対して問題提起していると思うので、なんにせよ社会が一歩前に進んだと私としては肯定的に捉えています。

編集部　オタク文化に関しても少し似た思いを抱えていて、二〇年ほど前には周りに隠すものであり、社会に知られて居なかったものが、今は広く認知され、テレビ等でも肯定的に扱われています。社会が変わって行く過渡期にいるのでしょうか。

本田　そのように隠すような状況だったからこそ、「若いころにはゲイなんて居なかった」と言い出す人が居ますが、でも昔からＬＧＢＴＱは居るんです。突然変異とかでは全くないので、昔のキリスト教社会では同性愛というのは過剰な性欲の表れのような捉え方されていましたが、今は徐々に考え方が変わってきています。

編集部　私が常々不思議なのは、ＬＧＢＴＱに対して攻撃する人達はなんでそんなに自分のセクシャリティに自信があるんだろうという点です。私は今異性愛者のシスジェンダー男性（生まれた性が男性で、性自認が男

性）と自己定義していますが、自分が一生女性しか好きにならないと断言する事は絶対にできないと思います。

本田　そもそも自分を認識するというのは、自分のこれまでの経験から自分の人格に対して記述与えて行きます。例えば僕はこれまで女性のことが好きでしたから異性愛者であると認識しているわけですが、でも明日物凄く素敵な男性に出会って、もしかしたらその人に恋心を抱くかもしれません。そうしたら僕はゲイになってる可能性もあるし、バイセクシャル（両性愛者）やパンセクシャル（全性愛者）になっている可能性もあります。それはただ単にこれまで自分がそうだったというだけ、これからもそのような性的指向であるかは分からないわけです。それでも否定するのは自分が見て来たものしか信じないというような観念に近いのかと思っています。それ以外を認識できないし、否定する感覚ですね。そのような方からすると、マジョリティとして足元が揺るがされるような気持ちなのでしょうか。

私は今は異性愛者だけど、もう明日からは同性愛者になるかもしれない、ぐらいのつもりで生きているので、そういった感覚はないのかなと思ったりしますね。

編集部　**それぞれの価値観で外見が魅力的な人が居たとして、性別が女性だから魅力的だなんて外見から判断はできませんよね。**

自分の周りに差別はないのか、差別はないと思っていたのか

編集部　**今までのお話を踏まえると、お互いの多様な価値観をどんどん世の中に出していくことが重要で、それに対して共感するかは横に置いて、そういうものが世の中に存在することを知ると一歩前に進めるという、「存在しなかったもの」から「存在するけど自分は関係ない」ものになり、「ひょっとして自分も関係あるかも」に進んでいくためには、やっぱり一足飛びには進めないと思います。まずは存在することを知ってもらうことしかできない。そうなると、「緑の風」ももちろん、メディアが発信していく人を増やしていくしかないのかな、と思います。**

ただ同時に、表現する事を強制してはいけないとも思います。性的指向性自認について、私は性対象が女性で自己の性を男性だと認識していて、それを表現することにためらいは無いわけですが、私がマジョリティに属しているからであって、いつ自分に攻撃の矛先が向くかを考えると、なかなか発信できませんよね。ハラスメントから自分を守るために自分を偽り続けている人に、自分の性自認性的指向性の表現をどんどんしろっていうのも酷い話ですよね。一般論のようになってしまいますが、お互いに尊重していくためにはどのような協同ができるんでしょうか。

本田　まず仰って頂いたように、そもそもセクシャリティをカミングアウトする自由もあるし、しない自由もあるというが大前提だと思います。そしてカミングアウトした先の社会というのが、より良いものになっていくべきだと思います。それをどう構築していくかという問題ですね。

そこには当事者だけではなくて、他の人の理解も必要でその中で一橋大学の学生が非常に良いなと思った点が一つあります。先ほど話題に上がったように、ＬＧＢＴの人間が周りにいなかったんだから、理解できないし知るよしもないといったような事を言いましたが、同じようになことを言う大学生も居ます。ただ、多くの学生はそこで考えが止まっているわけではなく、「じゃあなんで自分の

周りには居ないだろうか、もしくは居ないと思えていたんだろうか、もしかしたら自分がそう言えない環境を作っていたんじゃないか」という意見を授業のリアクションペーパーに書いてくれて、これは非常に良いなと思いました。

周囲に居ないということ自分の中で思い込みによる統計を作るのではなくて、居ないようにさせていた理由が自分にあるんじゃないかというところまで思考が及んで、じゃあ自分がどんな発言をしていたのかなっていう風なことを考えることが、より考えを先に進めますね。少なくとも、「何故自分はいないと思えていたんだろう」ということは考えていく必要があると思うんです。周囲に居ないわけがなくて、八％とか一〇％の人が（注：自分がＬＧＢＴに属すると認識している人だけでなく、Ｘジェンダーのように「わからない」「規定したくない」という層や、少なくともマジョリティではないと思っている人を含める）いると言うのは様々な調査で分かっていて、そう考えると左利きの人と同じくらい居るＬＧＢＴの人に対して、今自分がやってる事ってどうなんだと自問自答すると、きちんと考えれば、仕事終わりに、異性の接客があるような夜の街に、みんなで繰り出すみたいなことにはならないと思うんです。

だから自分の環境っていうのが、自分がそうさせていたのではないか、という自問自答ができれば、おのずと行動と意識が変わって行くと思うんです。それを自分の行動に落とし込む必要があって、そういう意識から理解をしていかないといけません。〝アライ〟（ally 同盟・支援者 ＬＧＢＴの当事者ではない支援者を指す）って言われるの方が活動しやすい面も大きくあって、もちろん十分に理解できていないかもしれないし、細かいところまで分からないかもしれないけれど、目指している社会は当事者の人と一緒だと考えています。と言うのも、当事者の人は活動していく上で大きなリスクが伴うわけで、あの人はＬＧＢＴなのかな？と思われると実際にその人が当事者だった場合それがアウティングなってしまいかねません。僕が活動する中でゲイ野郎だと言われても、事実異なるので否定して終わりですが、当事者からしたらそれでは済まないので。

明日の社会のマイノリティへ

本田　そう考えるとやっぱり自問自答を繰り返して社会を変えていくという手順が必要で、ドイツの牧師であるマルティン・ニーメラーの

ナチスが最初共産主義者を攻撃したとき、
私は声をあげなかった 私は共産主義者ではなかったから
社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、
私は声をあげなかった 私は社会民主主義者ではなかったから
彼らが労働組合員たちを攻撃したとき、
私は声をあげなかった 私は労働組合員ではなかったから
そして、彼らが私を攻撃したとき 私のために声をあげる者は、誰一人残っていなかった

本田　という言葉がありますが、今はマジョリティかもしれないけれど、明日わが身の事になるかもしれない、さっき言ったようにゲイになる可能性もあるし、そんなことは分かりませんよね、それこそ人知の及ぶところではない。そういった明日自分に不利益になるかもしれない社会を変えていく責務というのは社会の当事者である国民にあると思うんです。

そういった自分と自分の認識に対する客観

Several Things You Need to Keep on Your Mind for Diversity

LGBTQ+ Bridge Network作成資料　人のセクシュアリティを知った時、あなたならどう行動する？？

的な認知ができていれば、その行動もおのずと変わっていくし、自分に何ができるかなと結びついていく気がするんです。アライである事にあぐらをかいていると危ないので、積極的に学んでいって、自問自答をして、どういった社会を目指していくのかを考えます。アライの活動をしていても、当事者であっても、間違った方向にいく事はあります。当事者だったらみんな同じ方向向いてるかというとそうではなく、レズビアンの人とゲイの人は全く違うコミュニティに居るし、究極的なこと言うとそれぞれの個人で、困難を抱えている人もいればそうではない人もいるし、そういった現状の中で最大の利益・幸福というものはどこなのか、考えて行くべきなのかなと思いますね。

編集部　この話は今世の中にある差別にも当てはまる話だと思って。何故自分の周りにコロナ患者がいないと思えるんだろうか、何故自分の周りに他の国籍の人が居ないと思えるんだろうか、そんな事を自問自答して、自分の振る舞いがそういった人達に何か嫌な気持ちを、あるいは言い出しにくい空気を与えていないだろうか、自分以外が世の中に居るという事を常に考えながら発言をするという考えは、この一橋大学の学生の考え方が勉強になりました、

本田　例えば国籍に対する差別に関しては、生まれた国が後天的に変わる事は中々ありませんが、万人に関係するＳＯＧＩに対してだったり、可変的であるセクシャリティついて考えると、今マジョリティに立っているけれどマイノリティになる可能性もあり、そうなった時の社会というものをどれだけ想像できるかという事が　一人一人求められてるのかなぁなんて思うし、大学生が一番そういった多様性に近く接している気もするので、他の当事者と連携しながら知見を広げて理解を深めていくのが、事件を経験した一橋大学だからこそやっていくべき事なんじゃないかと思います。

　大学という多様な背景の人がいる場所で、色んな価値観が出会って学びに繋がって行くなかで、自分の周りにはどんな人が居るんだろう、そしてどんな人が居ないと思っていたんだろうという事について、ぜひ考えてほしいですね。本日はどうもありがとうございました。

編集部　ありがとうございました。

（LGBTQ+ Bridge Networkの活動は、左記ＵＲＬよりご覧ください

https://hitupride.wixsite.com/lgbtqbridgenet）